

## 造形表現における鑑賞教育について

### ～兵庫県立美術館の「鑑賞教育プログラム」の実践より

佐藤 有紀

SATO Yuki

現在、教育の現場では子どもたちの「生きる力」の育成を目的として、子どもたちが自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力を育むことを目標に様々な実践がなされている。それに従い、近年美術館でも子どもたちの「生きる力」を育むために教える側（美術館側）が知識や教養を一方的に与えるのではなく、学ぶ側（来館者）が能動的に学習できるワークショップや教育プログラムが実践されている。本学近隣の兵庫県立美術館でも「能動的な鑑賞にむけてのアプローチ」を体験することを目的とした「対話による鑑賞プログラム」が行なわれており、今年から図画工作科教育法の授業で、実際にその教育プログラムを体験することが実現した。本稿はその「対話型ギャラリー・トーク」による鑑賞教育の実践報告である。

キーワード： 美術館 造形表現 鑑賞教育 対話 表現

#### 1. はじめに

現在の小学校学習指導要領解説には、この科目で育みたい資質として、「自分の表したいことを表現することと共に、様々な表現に対して自分なりの感じ方や考え方を深めること」が挙げられており、指導者は単に知識や技術を教え込むのではなく、子どもが「思いついたことを自分なりに表現する」ことができるように、それを協働的な立場でサポートする役割を担っている。そのためには、指導者側の立場の大人は子どもの自由な表現

を引き出し、その表現を受け取る力が必要である。

本学の「図画工作科教育法」の模擬授業では「鑑賞」として造形活動のまとめとして鑑賞を行う時間を設けているが、その「鑑賞」が、先生役の学生先導の「評価の時間」となりがちで、子どもの作品を褒めたり、頑張りを認めたりしてまとめられることが多い。これはまだ、実際の子ども「自由な表現」を想定することが難しい学生であるので仕方がないことではあるが、その評価の基準も「作品の出来、不出来」に偏りがちである。作品の「上手、下手」や「評価」に過剰に反

応する傾向があるのは他の造形表現の授業でも同じで、自分たちの作品の振り返り（鑑賞）の場面では、作者の心情を傷つけることを恐れて、「～がきれいにできている」「～が上手い」などという単純な褒め合いで終わり、という結果になりがちである。「表現」を言語化し、話し合うことはなかなか難しく、「評価」や「批判」に敏感な学生がどうすれば「鑑賞」という活動を深めることができるかということは、常日ごろからの筆者の課題である。

このように、表現を受けとる力を身につけるための「鑑賞の教育」に難しさを感じていたところ、90年代後半から「対話による美術鑑賞」を教育現場へ普及する取り組みを行っている上野行一氏の著書『まなごしの共有』（淡交社2001年）により、全国の美術館で子どもたちの「生きる力」の育成を視野に入れた鑑賞プログラムが実践されていることを知った。このプログラムは、作品について他者との対話の中で自分の考えや見方を広げ、深めるというもので、ちょうど、大学の近隣の兵庫県立美術館でもこの鑑賞教育プログラム（ギャラリー・トーク）が実践されているということが分かった。これは主に小、中学生対象に行われているプログラムということであるが、児童教育を学ぶ学生にも美術鑑賞を体験し学ぶことのできる良い機会になるだろうということで、今年度から『図画工作科教育法』の学外授業という形で参加することにした。

本稿はその鑑賞プログラムでの実践報告とその内容から「鑑賞の方法や目的」や「表現を受け取る力」について考察したものである。

## 2. 「鑑賞プログラム」について

一般に美術館で行われる「鑑賞セミナー」は作家によるギャラリートークや学芸員による作品解説、などである。以前、同じ美術館にて「生活と芸術」の学外授業で別の教育プログラムを受けたことがあったが、こちらも学芸員から展覧会の絵について詳しい解説を一方向的に受けるものであっ

た。この教育プログラムによつての作品鑑賞でも、ほとんど「芸術作品」と対面する経験がなかった学生にとっては、作品に対する理解を深めることのできる貴重な体験となったが、これは従来から行われている、「美術館側主導」の鑑賞体験であった。

今回の教育プログラムは、作品の知識を授かることが目的ではなく、初めて出会った作品を凝視し、自分なりにその意味を考えそして発見し、他者との会話の中でさらに見方を広げたり深めたりして、作品の理解という問題を解決していくものである。

本学の学生を美術館の鑑賞プログラムに実際に参加する前に、美術館の担当スタッフと引率者の筆者が事前に打ち合わせを行った。本学の学生の現状を伝え、担当者からは美術館の資料をもとに、教育プログラムのながれの説明を受けた。以下は兵庫県立美術館で実施されているギャラリートークの説明文である。この内容については鑑賞当日までの授業で学生にも伝えた。

### ギャラリートークについて（主旨）

兵庫県立美術館は、学校の団体鑑賞の際に、一つの作品を20～30人で話し合いながら鑑賞する「対話を用いた鑑賞法」を取り入れたギャラリートークを行っています。学校の授業で来館される多くの児童、生徒さんは団体鑑賞で初めて本物の作品と出会います。当館では、作品の知識や情報を得る前に、まず作品と出会うことを重視して、対話を用いた「ギャラリートーク」を行っています。この活動は、能動的な鑑賞へのウォーミングアップです。まずじっくり作品をみてそのあと作品について見えたこと感じたこと、発見したことや気付いたこと、思ったことや考えたことなどを発表してもらいます。

ギャラリートークでは以下の点を重視しています。

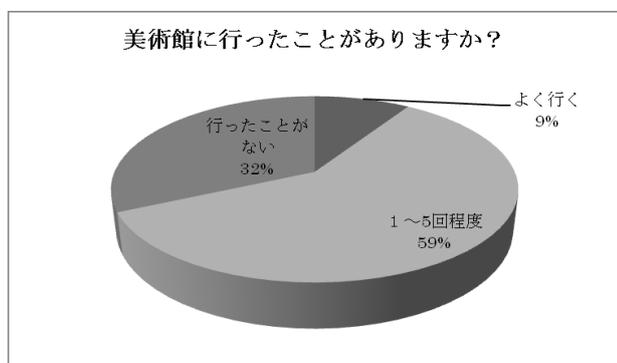
- ① 美術館という場所での緊張を解く
- ② 「自由に感想・意見を言ってもいい」という雰囲気づくり
- ③ 「自分の意見だけではなくて、仲間の意見や考えを聞いてみるのも楽しい」という気付き

### 3. 参加学生について

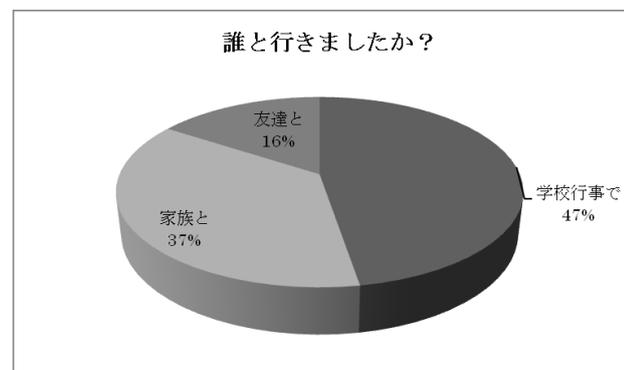
この美術館の教育プログラムに参加するにあたり、本学の受講学生（図画工作科教育法受講者28名）を対象に、以下のアンケートを行った。

アンケート結果により、美術館に行ったことのない学生も存在するほか、行ったとしても学校行事のことが多く、美術館が学生にとってあまりなじみ深いものではないということがわかった。また、別の項目で美術展の内容も記述してもらったが、一般的な名画や博物館の展示内容の他に、日本のアートの代名詞になりつつある、アニメーション作品（ジブリアニメやガンダム、ワンピースなど）に関わるものを観る目的で美術館を訪れることが多くなっていることがわかった。

常に芸術という概念は変化するが、現在の学生にとって芸術（美術）が、商業的なものまで広い意味でとらえられていること、個人の表現としての「美術作品」を実際に「観る」という機会は多くはないことが、このアンケートからは伺えた。



図①



図②

### 4. 鑑賞作品について

今回の教育プログラムは、「県美プレミアム 収蔵展～「みなと物語」新収蔵品を交えて～」という企画展の会場で行った。神戸開港 150 年を記念して約 100 点の作品が美術館の常設展示室 1～5 室にわたって展示されていた。『港（みなと）～人々の交流する場としての美術』をテーマとし、主に兵庫県のゆかりの作家の作品で占められていたが、海外の有名な作家の彫刻も並ぶ。

先出の『まなざしの共有』にも述べられているが、適切な作品を選び、トークの流れをつくっていくことは対話型トークにおいてとても重要なことである。担当の学芸員から、トークの組み立てとしては、物語性のある作品から始め、徐々に視覚情報が不明瞭な作品へと移行していくほうが効果的というアドバイスを受け、今回のギャラリートークで鑑賞する作品は、学生にとって内容が比較的分かりやすい具象的な作品から、抽象的なもの、そして海外作家の立体作品、と幅広く選定した。

この教育プログラムの対象は小学生であることが多いそうだが、今回参加する学生も美術を専門に学んでいる学生ではなく絵画の知識も豊富ではないことで、却って美術作品に対し何の先入感も持たずに対面することができ、この鑑賞プログラムが行いやすいと予想された。

### 5. 教育プログラム

美術作品鑑賞の学外授業は以下の行程で行われた。

7月15日（土）夙川学院短期大2・3年生 28名（引率 教員）	
※美術館スタッフ：あり ※当日他校の利用：なし	
	県美プレミアム展、レクチャールーム
10:00	美術館入館（北入口より）

10:10 (15分)	事前レクチャー（場所：レクチャールーム 進行：学芸員） ・ごあいさつ ・兵庫県立近代美術館と県美プレミアム展・特別展のご紹介 ・展示室での諸注意 ※部屋は施錠します。荷物を置いてなにも持たずに展示室へ
10:25 (5分)	移動
10:30 11:00	対話型ギャラリートーク ① 上田二郎（展示室1） ② 大岩オスカル（展示室1） ③ 田中敦子（展示室2）
11:00 (15分)	県美プレミアム展（1階） 自由鑑賞①
11:15 11:30	対話型ギャラリートーク ④ ジョージ・シーガル ※学芸員の対応はここまで
11:30	県美プレミアム展（1・2階） 自由鑑賞②
12:00	レクチャールームでまとめ 振り返り
12:30	解散

① 事前レクチャー

ギャラリートークの会場に入る前に、別室で兵庫県立美術館教育プログラム担当の学芸員より事前レクチャーを受ける。} \_学生のお多くは関西圏出身であるが、この美術館に来ること自体が初めてで、美術館の上部に設置してあるカエルのオブジェの説明から日本を代表する建築家、安藤忠雄設計の本館の話に興味深く聞いていた。一通り、美術館と展示内容の説明を聞いたあとで、このギ

ャラリートークの概要と美術館でのマナーを説明された。

① 対話型ギャラリートークの方法

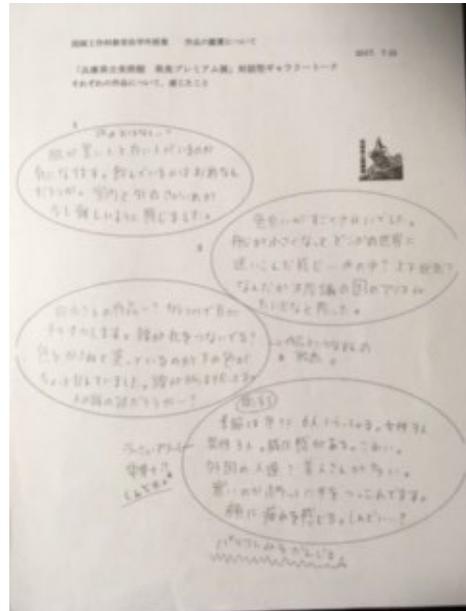
対話型ギャラリートークは学芸員の進行によって、絵について自由に意見を述べる。学生はそれぞれ、絵が見える好きな位置に座り、自分の感想を予め配布した感想用紙に作品に対する自分のコメントを書き込みながら、他の学生の意見に耳を傾ける。



図③ レクチャールーム



図④ 兵庫県立美術館エントランス



図⑥ 感想コメント用紙

この対話型ギャラリートークでは、観る作品の内容に関して何の先入感も持たぬように、あらかじめ作品の横にあるタイトルの部分を紙で隠してあり、制作年や作者についての情報もあまり与えられない。そして、本当に作品から読み取れることのみに集中して絵画を観ることを促される。

## 5. 対話型ギャラリートークの実践

### ① (上田二郎作品)



図⑤ ギャラリートークの様子



図⑦上山二郎「静物」(1922年油彩 162.2×89.3 cm)

上の作品は、地元兵庫（芦屋）出身の作家「上山二郎」の作品である。このギャラリートークの最初の鑑賞作品に適しているということで学芸員から推薦された作品で、具体的な描写ではあるが、画面構成が複雑な物語性のある絵である。それほど大きな絵ではないため、かなり近づいてみることも許可された。学生はその絵の細かいところまで見入っていた。



図⑦

しっかり作品を観た後、学芸員に感想を求められ、指名されると自分が感じたままの言葉を話し始めた。その内容をその対話中に書き込まれた学生の感想メモとともに振り返ってみたい。

〈上山二郎作品についての感想〉

～対話は絵の第一印象から始まった。

- ・お酒のんでるんだ！
- ・赤い服の人がふくよか

- ・塗りが分厚い
- ・なんか色がきたない
- ・夜のイメージ
- ・細かい線で1本1本描かれていてすごい。

～時間が経過し、さらに絵を集中してみていると、学生の中から画面の構成の話になる。

- ・3つの場面に分かれている
- ・色々な場面の絵が詰めこまれていて不思議な絵やなと思った。
- ・煙の位置が不思議

～一つの画面の中にいくつかの空間が描かれているということに気づいたところから、次第に画面に描かれている情景に物語を読み取り始めた意見がでる。

- ・女性が一人後ろをむいていて不思議と感ずる。
- ・出て行かれた奥さんのことを想像していると思う
- ・なんで人種がちがうのか
- ・肌の黒い人と白い人がいるのが気になります。飲んでいるのはお酒だろうか。室内と外の境目が難しい。

～そしてそれぞれの意見を聞きながら、個人の意見とともに、全体としての作品の内容についての読み取りが深まっていく

- ・不思議な作品だなと思いました。きっと物語があるんだろうなと勝手に考えています。
- ・夜に考え事をしていて思っていたこと、頭の中を表したものだと思った。
- ・たくさんの世界が一つにまとまっている。想像した世界を見てみたい。上に吸い込まれていきそうに感じた。
- ・人によって絵の見方がちがう 煙の出かたや肌の色、室内の家具の配置が不思議だった。
- ・ぱっと見て何が描いてあるか何が伝えたいのか分からなかったけど皆と意見を出し合うことで色々な見方があるなと感じた。

この作品でのトークでは、一人では気づくことのなかった感想に刺激を受けあいながら絵画空間に描かれている情景に時間の流れや、国の隔たり、文化の違いを発見していく過程をみることができた。また、タイトルが隠されていたことで、さらに会話の幅が広がっていくことを感じた。

筆者が美術作品を観るときは作者の経歴やそれが作られた時代背景をあらかじめ知った上で作品を鑑賞することが習慣になっている。作品のタイトルを気にすることはあまりないが、今回のように何の前知識もなく絵と向き合う機会はほとんどない。どのような展示でも一般の鑑賞者は美術館側から提供される情報を読みながら絵画を観ることが多いであろう。

しかし今回のように、何の前知識もない学生でも、自分の感覚だけで絵画表現を受け止め、それを言葉にするということ共有することで、表現を深く掘り下げて感じて語るができることを知った。

## ② (田中敦子作品)

鑑賞作品の1、2作品は具体的なイメージを用いた作品であったが、3作品めは、いわゆる「抽象画」という分野から田中敦子の作品を選んだ。田中敦子氏は1954年に芦屋市で結成された具体美術協会のメンバーである。具体美術の作家は、泥に飛び込んだり、縄にぶら下がって足で絵を描いたり、紙をつきやぶったりする「行為」そのものを美術の表現とした。

そのため、展示された作品そのものを観ると、その作品のエネルギーや迫力は感じられるが、何か具体的なものが描かれているものとしてとらえると混乱を招く種類の作品である。絵のジャンルを単に「抽象画」と「具象画」で分けることも現代においては疑問視されているように、「抽象画」のコンセプトは多様であり、一般の鑑賞者には「なんだかわけがわからない」と敬遠されがちな部類の作品である。近年この「具体美術」は海外で再評価され、その作品価値はさらに高くな

っているが、このグループが生まれた地の兵庫県でも一般的にはあまり知られていないのが現状である。美術史における「抽象画」の位置や、「具体美術」の活動や作品について、ほとんど知識のない学生が、このような、「何が描いてあるか見てわからない」作品の実物を観た時に、その表現をどうとらえるか、その反応に興味があった。



図⑧田中敦子「作品」(1960年アクリル 161.5×130 cm)

このトークも、まずは作品をよく視ることからはじめ、それから学芸員が作品の印象について個人の感想を聞いていく。以下はこの作品に対しての感想である。

- ・ぐちゃぐちゃに丸とか線が描かれている。線は絵具を筆で落とすみたいに描いているように見えた。下の方が明るく上の方が暗めの色になっている。
- ・丸と線がいっぱい。きれいにならんでいるようにみえてそうでもないし 何の意味もなく描いたのかな?とおもいます。
- ・ぶつぶつが気持ちわるい。
- ・上が寒色系で下が暖色系だと思った。線にふれていない丸がひとつもなかった。

- ・あかんさっぱり分からへん。私にはふつうに丸かいて適当に線描いてるとしか思えん。微妙にばらばら……。大きさも線も色も。
- ・丸はきれいなのに線が雑すぎるのが気になった。
- ・勢いよく筆についた絵具で線をひいている。描いた人は嫌なこととかがあつてそれをこの絵に当てるように描いた？（感情をぶつけた？）とか思う。



図⑨



図⑩ 田中敦子作品 鑑賞の様子

はじめは予想通り、「よくわからない」という意見が出た。しかし、さらに作品を眺めているうちに描かれている形から、なにか具体的なイメージを連想する「見立て」の意見が出る。

- ・おたまじゃくし おたまじゃくしがいっぱい

- ・丸の色が感情を表していて、線が血管にみえた

その形のイメージは、おたまじゃくし、人、ボードゲーム、ブドウ、など色々だが、そのワードから、学芸員は「集合」と「つながり」というワードを拾い上げた。その言葉をもとに、そこから、作者が作品で表そうとした意図を汲み取ろうとする意見に変化していった。

- ・カラフルで目がチカチカする。線が丸をつないでいる？色を重ねて塗っているのが下の色がちょっと見えていました。線がからまりあっている。人の縁の話だろうか……？
- ・自分の中の迷いと葛藤 なにかをつなげている感じがする。それは本人にはわからないけどこうやって絵にすることで心の中を整理しているようにも思う。

ここまでの感想が出た時に、学芸員から、『この作家はこの作品に関連した電球服という作品を作り、自らそれを身につけて発表した』というエピソードを知らされる。そのことばによって、沢山の「丸」のイメージがそれまででできたこの絵画作品の具体的なイメージと繋がり、さらに絵の解釈は広がっていった。この絵の本当の『意味』は、この場で作家の言葉としては明らかにはされていない。しかし、観衆である学生の作品に対するイメージを集め繋いでいくと、具体美術の物質と人間精神との関係性の構築というテーマに近づいていったことが感じられた。これは、学芸員が半ば意図的に誘導したものなのかもしれないが、鑑賞者の自由な感想を引き出し、作品の本質に迫る鑑賞内容に統合していく流れは見事であった。トークを誘導する者は、その作品だけではなく、その作り手や、その作品に関わる全体の知識がないと鑑賞を深めることはできないことがここで明らかになった。

終わりに作品の題が、単に「作品」であるということが知らされ、鑑賞者である学生にとっては

更にこの絵画に対する謎が深まった様子であったが、学生の表現に対しての考え方が、だんだん、柔軟になっていくように感じられた。

- ・ 作品名が『作品』にびっくりした
- ・ 色々と考えているかんじ
- ・ タイトルがないのがいいと思いました。

しかし、後で感想のメモをみると以下のような素直な意見も聞けた。

- ・ こんな絵っていったらダメだけどこういうのを美術館に置いてもらえるんやと驚いた。
- ・ 絵の全体をみて、何を伝えたいのかは分からなかった。

## ② (ジョージ・シーガル作品)



図⑪ ジョージ・シーガル作品 正面



図⑫ ジョージ・シーガル作品 鑑賞の様子

最後のギャラリートークの作品は立体作品である。ここで鑑賞する作品は、ジョージ・シーガルの「ラッシュ・アワー」というタイトルの作品である。ジョージ・シーガルは石膏で染み込ませた包帯の布切れで実際の人体から塑像を型取りし、日常風景と組み合わせた作品を残している。それらの作品は『石膏で形どられた日常の「殻」は、沈黙のドラマの低く濃く流れる時間の厚みを凍結し、生活者の姿勢の無意識を空白の陰画として相対化する』と解説されている。この作品はその技法を用いた等身大の人体の群像で、今にも動きだしそうなリアルな作品である。

このトークでも鑑賞者の学生は、作者の意図や作品の制作方法、材質、タイトルなど何の知識も持たずに作品と対面する。ここまでの鑑賞で参加学生もこの鑑賞方法に慣れてきた様子で、自由に感じたことを言葉にしていた。

- ・ 今にも動き出しそう。
- ・ コートを羽織っているから秋か春かなと思った。
- ・ 夢にできそう。怖い。
- ・ 金曜の帰りで土日出勤を言い渡された。
- ・ 後ろ足つま先だけしかついていないのに立っている！立つように考えながら作ったのかな？
- ・ 顔つきがそれぞれちがいが、冬なのにサンダルをはいている人もいて不思議におもいました。
- ・ 顔に疲れを感じる。
- ・ リアルだった。青い線が見えて不思議だった。
- ・ 全体に妙にリアルなかんじとぼかしている感じが気になる。前に進んでいる。仕事に行くんや。暗そうな雰囲気
- ・ 一からスタートするような足のはこびだと思った。
- ・ 同じ方向を向いて歩いているので何かに向かっているのは確かだと思うけど皆顔が笑っていないので楽しいのではないと思う。

学生は非常に注意深く立像を観察し、服装の特徴や表情、体制を身体の傾きから様々な推測をしていく。この作品はこの美術館に常設展示しており、筆者には「有名なジョージ・シーガルの作品」

としての認識はあった。以前から存在感のある不思議な作品であるとは思っていたが、今回のように、彫像を観察し、その群像が何を表しているかということをしつくりと考えたことはなかった。ただ、重苦しい雰囲気作品と感じ、なにか政治的な意味をはらんでいると思ひ、またゆっくり観ようなどと考えていた。しかし、新鮮な視点をもつ学生と一緒に改めて作品を鑑賞していると、単に暗い印象の作品と思っていたことから新しい見方が生まれ、どんどん人物に対する空想が広がって行くことを筆者も体感できた。

トークでは、群像の特徴、動きの表現から、労働者が通勤電車に乗り込んでいるところを表している作品だという結論に至り、「ラッシュ・アワー」というタイトルにも納得してギャラリートークは終了した。

## 6. ギャラリートークを終えて

今回、様々なタイプの作品を鑑賞しギャラリートークを行ったが、どの作品に対しても鑑賞者(学生)の率直な感想を沢山聴くことができた。事前に進行役の学芸員から、年齢が高くなるほど人前で自分の感じたことを話すことに対して臆する傾向があることを聞いており、また冒頭のアンケートの結果でわかるように、学生の多くは美術鑑賞の経験が少なく、美術館という慣れない場で意見を述べ合うということがうまくいくのか、少し懸念があった。しかし、学芸員の「どんなことを感じますか?」「なにが見えますか?」というシンプルな問いかけに対して皆で少しずつ感想を言い合い、その意見について考えたり共有しているうちに、今まで気づかなかったことに気づいたり、自分の意見が受け入れられたりする体験を通して、次第に作品に対する意見が活発に出るようになった。その様子や、それぞれの自由な発言から、参加学生がこの鑑賞体験を楽しんでいることが感じられた。そして、感想のメモからも、色々な作品の多様な表現を観て、それについて実際に言葉にしてみることで自分自身も新たな発見があったこ

とが伺えた。また、その感想からは、鑑賞作品②の田中敦子氏のように、最後まで「意味がわからない」という感想であった作品の鑑賞でも、作品を「観る」という行為から新たなものの見方の視点を得るという体験ができたということが推測された。

美術の鑑賞はその価値や時代背景を知ることによって知見を得ることの他、そのものの良さ、美しさまた、様々な情感を感じとることができるのである。しかし、その良いもの、美しいものという受け取り方は人によって異なる。人の感じ方は多様であり、その感じ方に「正解」「不正解」はない。

今回のギャラリートークでは、進行役である学芸員は常に聞き役の位置で、鑑賞者(学生)が中心になって話すことができるよう、配慮されていた。そしてそこにいる人皆が平等で、自由に発言ができるような雰囲気が保たれていた。このところが鑑賞を深める鍵であったのであろう。

## 7. まとめ

今回参加したギャラリー・トークは、1990年代に始まった基アメリカのアメリア・アナレスの鑑賞教育が基とされている。アナレスの実践方法を以下に述べる。

アナレスは鑑賞中心の芸術理解・芸術体験をめざしている。観衆の意見をよく聞き、観衆がどのように感じ、どのように理解しつつあるかを注目することに基本をおけば、教師や美術館スタッフの専門的な知識を押し付けなくとも、観衆は自ら気づき、成長していくことができる。

受容 観衆の意見を受容する  
 交流 観衆相互の対話を組織化する  
 統合 観衆の意見の向上的変容を促す

- ① 受け入れる
- ② 観衆の意見からはじめる
- ③ 良さを見つける 温かい関心をもち聞く
- ④ ほめる

⑤ ともに喜び、ともに楽しむ

アナレスは従来の鑑賞法と対話型との違いを『知の伝授と知の創出の差である』とし、『知識や物事を認識する力を身につけるには観察力が不可欠である。討論することはお互いの考えを知ることである。見たことを言葉にしたり、それを他人と話合うことが自己表現に役立つ』と述べている。

今回のギャラリートークの実践でも重要なことは「みること（観ること）」と「言葉にすること」であった。アナレスは見たことを言葉にすることに対して『物事を描写し、討論することでふだん使わない言葉を思いおこし、使うようになる。美術作品を言葉で表現することは、すなわち普段の言葉では説明できない事柄に言及することです。そのためには、言葉を掘り起こし、難しい言葉を駆使して表現しなければなりません。』と述べている。今回の対話型の鑑賞では、あまり美術に関心がなかった学生が、実物の作品と対面し、観察してそこから何かを読み取り、言葉にするという行為と他人の多様な考えを受け取ることによって自分自身の考えをまとめてゆくという「知の創出」の場面をみることができた。

表現を受け取り、それを言葉にすることは容易ではない。しかし、そのことにあえて向かい合うことが、自分を表現することであり、生きる力を養うために必要な自分自身で考える能力を身につけることに繋がるのである。そしてその経験によって、他人（子ども）の表現を受け取ることができるのであろう。

8. 今後の課題

鑑賞の場での指導者の立場についてアナレスは次のように述べている。

『観衆とともに考え、ともに歩もうとすることが大切。その態度がなければ専門家である教師や美術館スタッフ自身の進歩もない。人間として対等の関係を実感し、心の響きあいを心がけること。教師や美術館スタッフはまさに生徒（学生）や観客とともに人間的成長を遂げるのである』

これはそのまま、こどもの造形の活動に関わる者にそのままあてはまる言葉であり、その指導者を育成する教育機関の指導者にも共通していえることである。

また今回の鑑賞ではあらためて対象物（作品）をじっくりと観察するという意識したが、現代社会では様々な画像や映像によって物事を認識することが増え、目の前のものを能動的に見るという機会が減っていることを改めて感じた。また日頃、何か心が動かされたことがあると即座に携帯電話やスマートフォンで撮影する学生の姿を良く見るが、現代の人々は何かをしっかりと見たり味わったりすることよりは、それを記録することの方に気を取られ、多くのことを知った気になってはいるが、ものをよく見ていない傾向があるのかもしれない。

今回の実践では鑑賞することが、ただ「観て」「知る」だけではなく、自分の考え方を確かめ、言葉にするという、「表現活動の一部である」ことが改めて実感できた。今後の鑑賞教育の場においては、学生が表現に直に触れる機会を意識的に設け、その経験によって感じたことを丁寧に言葉にすることができる環境を作ることを心がけたい。そして、指導者が鑑賞者の言葉に耳を傾けるという態度を示すことで、子どもたちの表現活動においても、まずは、子どもたちの言葉を聴き、共感し、ともに学ぶ姿勢が大切であるということを学生に伝えていきたい。

9. 引用文献・参考文献

- 中原佑介 監修（1984）現代美術辞典 東京：株式会社美術出版社  
 上野行一（2001）まなごしの共有 アメリア・アナレスの鑑賞教育に学ぶ 京都：株式会社淡交社

### ピアスーパーバイザーからのコメント

本実践報告は、本学の図画工作教育法で実施されている、鑑賞プログラムの有効性が示されたものである。実際の美術館で小学生を対象とした体験的プログラムの一環でされている「対話型ギャラリートーク」を取り入れ、受け身になりがちな鑑賞教育から脱却した、能動的に自己表現できる鑑賞教育をめざした鑑賞プログラムになったと思われる。今後、更に改変された、充実したプログラムになることが期待される。

(担当：高田佳孝)